

知られざる版本：ジッドのルイス宛書簡集（2）

吉井，亮雄
九州大学文学部

<https://hdl.handle.net/2324/19374>

出版情報：流域. (35), pp.43-53, 1993-11-10. 青山社
バージョン：
権利関係：



知られざる版本（二）

——ジッドのルイス宛書簡集——

吉井亮雄

ないので、筆者がおきなう。

*
**

八通の書簡を紹介するにあたって、まずそれらの日付について一言しておこう。刊行者が「一八九四年四月半ば」とおきなう書簡4（この補記が不適切なことは後述）と、ジッドが書状に日付を明記している書簡7（これのみ冒頭部のファクシミリが付される）をのぞけば、あとはすべて「」のなかにイタリックで年月日が挿入されている。表記法の慣例から判断するかぎり、これら六通については封筒が保存されており、その消印の日付によるものと思われる。ひろん本来ならば、校訂にかなする説明があつてしかるべきだが、すでに述べたような刊行者の学術的な厳密さを欠く姿勢からはのぞむべくもない。オリジナルの所在さえ明らかにされていない現時点では、あたえられた日付を信ずるほかあるまい。ただし、書簡3を刊行者は「一八九二年二月二十八日」とするが、書状冒頭にジッドが「土曜日」と記していることから、曜日の対応する前日「二十七日」に訂正する。また、最初の二通の発信地についてはジッドによる記述が

ジッドとルイスとの交流を全期間にわたって考察することが本稿の目的ではないので、先行時期にかんしては必要に応じそのつど言及するとして、とりあえずは最初の二通が書かれた一八九〇年から話をおこそう。それまでの良好な友情関係の延長として、この年の初期においても、ルイスの詩をジッドが賛美し、ジッドの散文をルイスが称えるというふうには、二人は互いを高く評価しあっていた。たとえば、ジッドについてルイスはある友人に宛てて、「われわれの仲間のなかでもっとも前途有望なのは彼だ。『：』ばくは彼が今日もっている散文をいつかは自分のものにできればよいがと思っている」と書いている。

ジッドが処女作『アンドレ・ヴァルテルの手記』（当初は作中作品と同じく『アラン』と題されていた）の計画をルイスに打ち明けていたのも、このような相互信頼があったからだ。ところで、この作品はジッドが「長い愛の宣言、愛の告白」と考えていたもので、彼のなかでは従姉マドレーヌへの愛と同一視されていた。腹案は青春時代をつうじて練られていたが、まだ具体的なかたちを整えていなかった。二十歳のうちに（つまり同年十一月二十二日より前に）完成すべきだと考えたジッドは二月に、初稿執筆の目的でオワーズ県のピエールフォンに赴く。そこではさほど仕事が進んだとは思われないが、それでも三月二十六日には作品についてルイスと長く熱狂的な話し合いがもたれている。そして六月初旬からはアヌシー近郊のマントン・サン＝ベルナールで本格的な執筆がはじまり、約一か月後には第一部の初稿が完成することになる。

だが、その少し前からルイスとの関係には不吉な影が射しはじめていた。ヴァレリーの存在がそこからんできたのである。この間の事情はよく知られているが、書簡紹介の前提ともなるので簡単に触れておこう。五月の下旬にルイスは、マントンにでかけるジッドにかわってモンペリエ大学の創立六百周年を祝う祭典に出席したが、その機会にヴァレリーと知り合い、意気投合する。ルイスの感激は大きく、この秀でた知性に心酔した手紙をジッドに送る。ジッドもはじめは祭典に参加しなかったことを悔やむだけだったが、じきに不安をもらしはじめる。それにたいしてルイスは六月四日、「君

はぼくの手紙を読んで、あまりに〈非ジッド化〉しないようにと書いてきた。安心するがいい。ぼくがヴァレリーのになるとき、ぼくは逆に非ジッド化しないのだから」と保証して慰撫につとめるが、十六日の手紙ではいらだちを隠せなくなる——「君がこんだけうなべりをくれたことをうらめしく思う。なぜなら、それはぼくの計画を台なしにするからだ。ぼくは、心うばわれる大量の文通をヴァレリーとはじめようとしていたのだ。そして、ぼくは君にごく簡潔なハガキを送って、いちどきに二人の友人を研究する暇はないから、さしあたり君を放っておくと伝えようとしていたのだ」。これにたいしてジッドは二十三日、ミラン前掲書によれば「数頁にわたってルイスの人の柄にかんする罵言と侮辱」をつらねた手紙を返している（同書による引用はごく部分的。また、日付がジッド自身の記述か、消印によるものかは明示されていない。二十二日付の母宛には、同日ルイスに「長い手紙を書いた」とあるので、あるいはそれか）。つぎの書簡も消印によればやはり二十三日のものだが、後追いで執筆・投函されたものと思われる。

★書簡Ⅰ（一八九〇年六月二十三日、マントン・サン＝ベルナール）

「主体が客体によってしか存在しないように、君が君の熱狂するものによってしか存在せず、熱狂が君の表象というよりも、君のほうが熱狂の表象であることを、ぼくは理解しはじめています」が、それにたいして「ぼくがそれほどまでに謙虚に熱狂し、それ

ほどまでに献身的に賛嘆できるのは、ぼく自身しかない」と、ルイスとの相違を指摘したうえで、自我への没入が熱っぽい調子でくりかえし語られる。たとえば、「ぼくはちっとも自分に退屈することがない。ぼくは無尽蔵だ、そして、ぼく自身の内奥を探って、日々、多くの若々しい新しさを発見している」。あるいは、「自分の内的な力を感じること、ぼくの生はすっかり変容する。そして事物に投影されたぼくの夢は、すばらしい光で事物を照らす。ぼくは幸福だ！ ぼくには生がきらめいて見える！」

自我への没入とそのさいの高揚感は異様なほどだが、ではこれはいったいなにに由来するのだろうか。私見では、ルイスへのいらだちが前便の執筆によってやや軽減し、それにもない創作による熱が前面にあらわれてきたのではないかと思われる。すなわち、皮肉な調子は依然として残すものの、ジッドの視点は、ヴァレリーにたいするルイスの熱狂を責めることから、彼との気質上の相違を認識することへと移行しはじめ、そしてこの感情の変化につれて『手記』執筆によってえられた充足感が彼の精神を支配するにいたったのである。これはけっして根拠を欠く推測ではない。先述のように、同作品の第一部初稿がまさにこのころ完成間近であったからだ（ジッドはその旨を六月末に、母ジュリエットや、従兄で画家のアルベール・デマレ、さらにルイス本人に告げている。ただし後二者については、それぞれの返信による）。しかも、「白い手記」と題されたこの第一部は、主人公

で語り手のアンドレが、母を亡くし従姉エマニュエルへの愛も断念したのち、ブルターニュで過去の思い出を生きなおしながら、二重の失意を克服する過程をへて、小説『アラン』の着手を決意するまでを描いたもので、彼の発狂と死で終わる第二部「黒い手記」とは対照的に、甘美な回想をまじえながら希望にむかって開かれているのである。そういった精神の遍歴を創作行為において追体験することがジッドに過度なまでの高揚感をもたらしたとしても、なんら不思議なことではあるまい。

二十六日付のルイスの返信はなかなか手厳しい——「なぜ、そんなに不安をもち、嫉妬するんだい？ 君はぼくにケンカをふっかける気なのか？ ぼくのアラン、君は恥ずかしいほど不道徳だ。ええ、わたしには愛人がおりますわ、だんなさま。あなたの不在を慰めてくれる愛人が何人もおりますわ」。だが、遅ればせながら四日後には、『手記』の第一部がほぼ完成したことに、若干の皮肉をまじえながらも、これを喜ぶ手紙を送っている。そこには先の書簡1をふまえたと思われる表現も見いだされる——「ついに！ やったんだな、君？」「君は幸福だ、チクシヨウめ！ さあ！ 進みたまえ、書きたまえ、ひねり出したまえ、策をめぐらしたまえ、紙のうえに君自身を注ぎこみたまえ、君自身から未知の富を引きだしたまえ、高揚される君の自我、君が考えたこともない君の自我のまえに酔いたまえ！」

ジッドは七月の五日あるいは六日にマントンからパリに帰る。

『主観』(ルシユフジ)と題された当時の読書ノートによれば、六日と七日の両日を、ベルナルダン・ド・サンリビエールの『ポールとヴィルジニー』、フローベールの書簡集や『ボヴァアリー夫人』『聖アントワヌの誘惑』、ドーデの『サッフォー』、シェークスピアの『マクベス』、ラブレールなどの読書に費やすが、ルイスに返信を送ることも忘れてはいない。だが読書の影響もあつてか、高揚は前便にもましてはげしく、ジッド自身それを制御できない感がある。

★書簡2(一八九〇年七月七日、パリ)

「ああ友よ、ぼくは何になるのだろうか？ マルクス・アウレリウスか、バイロンか、あるいはシャトーブリアン、はたまたアルキビデスか？」ではじまり、「ぼくは熱烈な信仰者になるのか、それとも不信心者になるのだろうか？ ぼくの慢心は栄光に陶醉するのだろうか、それともぼくの謙譲は浄化された献身に酔うのだろうか？」と将来の可能性を列挙したうえで、「それまでは赤ん坊のようにハイハイで生きている。自分がそのどれになるかが分かっておらず、すべての萌芽なのだ」。さらに、やや脈絡を欠いた「そういうわけで、君が話をしたいときには、いつでもぼくが相手になるう」という一文をはさんで、「ぼくは熱狂ではちきれそうだ。未来を見つめていると気が狂いそうだ」、などとつつく。

これにたいするルイスの十一日付の返信は未刊のため、彼がどの

ような感想をいだいたかは分からない。また、十三日付および十六日付もやはり活字化されていないので(ジッドの手紙は存在が未確認)、どのようなやりとりを経てなのかは不詳だが、ルイスは十七日、ヴァレリーとの関係をめぐってこれ以上二人の友情に齟齬をきたさないために、九月十五日まで手紙のやりとりを停止して、おたがいに作品の執筆に専念しようと提案している。三日後ジッドが送る返事は、つい先日の熱狂とは対照的に、全体的に冷やかな印象をあたえるものだが、提案それじたいには同意している。

中断されたのはルイスとの文通だけではない。夏のあいだのジッドの手紙はほとんど存在が確認されていないのである。したがって以後の『手記』執筆の経緯についてはごく大まかなことしか記録がないが、それによると、原稿は八月中旬にノルマンディーの小村ラ・ロック(母方の別荘があった)で一応の完成を見る。パリに帰りデマレに読んで聞かせるが、聖書からの引用のあまりの多さを驚かれる。ヴァカンスの残りを過ごすためにふたたび戻ったラ・ロックで、従兄の忠告を入れて引用の「三分の二」を削るとともに、全体の仕上げにかかる。そして九月半ばには「協定による沈黙」を破ってルイスに原稿の完成を報告している。それにたいする返事——「ああ、友よ、友よ！ 今度こそほんとうにうれしい。『アラン』が完成して、ぼくは、まるで自分が書いたもののように、はっとしている。だが、ぼくにそれを隠しておくなんて、きみはなんて残酷なんだ。『:]君がぼくより先に終えたことを、ぼくはうらめしく思う。君が

とても一般性のある散文を書くことはほんとうだ。「…」君は魂の糧をつくる。ハ！ハ！では芸術はどこにあるのか。君はそんなものクソクラエと思っているのじゃないかね。ともかく、どんなものか二人ともやがて分かるだろう。だが、おそらくそれはパスするだろう（パスしたというのではない、そうだろう、君？）（九月十九日付）。この皮肉と留保をふくむ予想からも、作品の基調をなすロマン主義的神秘主義がルイスの高踏派的な理想と一致するものだったとは考えにくい、それでも互いの処女作に一頁の空白を残しておき、それを相手に埋めてもらうという、以前の約束を尊重した彼は、作品を二十歳で死んだ若き詩人の告白として公表することを提案し、みずからピエール・クリシスの変名で死者略伝の執筆をひきうけている（ただしジッド自身の草稿も存在）。こうして『アンドレ・ヴァルテルの手記』は「遺作」と副題され、著者名を冠さず九一年二月末に出来^{しゅった}る。しかしながら、ディディエ・ペラン書店によるこの初版には誤植が数多く存在したため、ジッドの命によりただちに廃棄処分がとられることになる（すでにプレスサービスに使われていた約七十部だけが残存。なお同版は、本来は流布版として想定されていたものだが、死者略伝を付さないラル・アンデパンダン書店の限定版がおくれたため、結果的に初版の地位をえた）。

しかし、この不運さえもジッドにとつてはもはや取るに足らぬことだった。作品執筆の最大の動機といつても過言ではないマドレーヌが、期待していたような反応を示さなかったからだ。ディディエ・

ペラン版については普通紙刷に先行して同年一月、豪華紙をもちいた特刷非売版がごく少数つくられていたのだが、なかでもただ一冊、ヒロインの名をエマニユエルではなくマドレーヌとした中国紙刷を献ずることで、従姉が自分の苦悩を知り、感動とともに求婚に同意する、そうジッドは信じきっていた。ところが彼女から返ってきた答えは予想外の拒絶だったのである（むろんマドレーヌのほうにも心の葛藤はあった。独りになって『手記』を読んだ彼女は涙を流して感動したが、従弟の意図を察し、あえてそれを隠すようにつとめたのである）。

いっぽうジッドを喜ばせるものもなかったわけではない。とりわけ前年の暮から親交のはじまっていたヴァレリーの存在は大きい。十二月半ばに『手記』の最終校正^{しやう}を校をえたジッドは、モンペリエにむけて出発、到着するやすぐにヴァレリーに会った。この出会いには当然ながらルイスが介在していたが、こんどは彼のほうが不安を隠せない手紙をあらかじめヴァレリーに送っていた——「ジッドがぼくについて言うことはどうか一言も信じないでくれたまえ。君はぼくのことを彼よりもずっとよく知っているのだし、ことばくのことになると、彼が無能なことは周知の事実なのだ。…」ぼくの手紙もいっさい見せないように。ぼくは友情をそれぞれ別にしておくのが好きなのだ。でも君が彼に会うことはとてもうれしく思っているし、ぼくにとつてと同じく、彼が君にとつても親しいものになることを願っている」。これにたいし、ジッドと会ったヴァレリーは「ねえ君、ぼくは君の友人ジッドに魅せられ夢中になつてい

る。なんと絶妙で希有な精神なのだろう！ 美しい詩と純粋な思想にたいするジッドのなんとという熱狂！」と、手放しの賛辞を書きおくっている。喜びがこれに劣らなかったことは、その後たちにはじまり、急速に親密度を増していく文通からばかりか、ナルキッサ伝説を借りて象徴主義の精髓を示そうとした『ナルシス論』（九一年十二月出来）を、まさにこの『ナルシス語る』（ルイス主宰の「法螺貝」誌創刊号、九一年三月十五日に初出の詩人に捧げたことから容易に了解される。

ヴァレリーとの一件に特徴的なように、たとえジッドとルイスのあいだに微妙な距離が生じはじめていたにせよ、前者が当時、文学的な交友関係を急速に拡大していくのに、後者の仲介が大きく貢献したことだけは否定できない。またドレー前掲書は、二人の関係が九一年六月頃には「危機的状态にあった」と断言しているが、その正否はさておき、同年の八月から九月にかけてはヴァレリーを交えた三者間での詩の共作が提案されるなど、いずれもが「法螺貝」誌を軸に文学的交流を活発におこない、それによって友情の維持をはかるうと努めていたことは確認しておくべきだろう。

『ナルシス論』につづく『アンドレ・ヴァルテルの詩』もまた象徴主義的オーソドクシーのなかに位置づけられる作品であるが、そのラフォグ的な抒情には、『ユリアンの旅』『恋の試み』『パリュード』と徐々にあからさまになっていくイロニーの要素がすでにうかがわれる点を忘れてはなるまい。詩篇の大半はすでに九一年六月から九

月にかけて執筆されていたが、翌年一月には全二十篇が完成。うち八篇が同月、「法螺貝」誌の最終号にアンドレ・ヴァルテルの名で掲載された。そしてラール・アンデパンダン書店からの単行出版（四月四日刷り、限定一九〇部）を間近にひかえた二月末、ジッドはルイスに宛てて、ほんの数行の短信を送っている。

★書簡3（一八九二年二月二十七日、パリ）

「この上なく貴重なプレゼント」として「へけっして重刷されることのない」希少きわまりない校正刷、ただ一部かぎりの校正刷」を同封する旨を記し、「楽園のごとく水晶のようなアディュー」と結ぶ。刊行者によれば、贈られたのは第二十一篇の修正済み校正刷で、そこにジッドは自筆で「わが友ピエール・ルイスのために一部だけ特別に刷られた紙片。A・G」と献辞を入れる。

全部で二十篇なのに、贈られたのが「第二十一篇」の校正刷とあるのは、初版では死後刊行の体裁を強調するために、雑誌掲載時のような変名の使用だけではなく、かつての『手記』初版序文（死者略伝）に呼応する作爲がほどこされたためだ。すなわち、第十九篇と第二十一篇のあいだに、「二十」という番号だけが印刷された一頁があり、その最下部に同篇は「欠如」と注記されているのである。第十篇についても「われわれには、これが詩のプランにすぎないのか、あるいはアンドレ・ヴァルテルが十分な完成品と見なしていた

ものなのかは判別しがたい。P・C」と、ピエール・クリシス名義の脚注が添えられている（ただし、実際にルイスの手になるものか否かは未詳）。こういった死後刊行の体裁は第二版（一九二二年）において捨てられ、以後「第二十一篇」（第十篇とともに「法螺貝」誌には未発表だったもののひとつ）には現行流布版まで一貫して二十という番号があたえられている。なお、最終部分の校正刷が修正済みであることから、この二月末時点で初版出版のための準備作業はすべて完了していたと見てよいだろう。



1893年8月のルイス（於バイエルト）

この翌年には、先にも挙げた『ユリアンの旅』と『恋の試み』が部分的な雑誌掲載の後に単行出版される。しかし、それらがいかに自己否定的な要素を内包していたとはいえ、ジッドは虚構の力ではもはや統御しきれない内心の葛藤をこれまで以上に意識せざるをえ

知られざる版本

ない。清教徒的な克己主義が魂の平静をたもっていた幼少年期とはちがって、青春の目覚めとともにここ数年、肉体の純潔を守ろうとするあまり、かえって逆に精神の混沌をまねく結果になっていたからである。そして彼は、自らを二分する争闘にあって、いずれか一方を退けることは神にさからう行為ではないかと疑い、「この不一致な二元主義がひとつの調和におちつきはしないものかと考える」ようになる。そして、その調和の探求こそが彼のもっとも重大な目的であり、一生を賭けるに値するものだと思われたのである。

こうしてジッドは一八九三年十月、均衡と充実と健康をもとめて、友人の画家ポール・リアルペール・ローランスとともに北アフリカにむけて出発する。しかしながら、トゥーロン、マルセイユ、チュニスなどをへて十一月十一日に到着したスース（チュニジア）では早くも予定を変更せざるをえない。トゥーロンでひいた風邪をこじらせ肺炎にかかってしまったのだ。頻繁な移動はもう無理なので、気候のよいアルジェリアのビスクラで冬を過ごすことにきまる。このためスースは六日間の短い滞留におわったが、伝記的・年譜的には大きな意味をもつ。そこでジッドが初めての性



Paul Laurens

交渉、しかも少年を相手の性交渉を経験したからである。この体験は彼に強烈な印象を残すことになるが、同時に、彼のなかで本質的同性愛者としての自覚はまださほど強くはない。やはり女性との接触によって禁欲的自我を救済することが主要な課題として意識されていたのである。同月下旬にはビスクラに到着、やがてこの地で療養をかねた奇妙な共同生活が始まる。ジッドはメリアムという名のウレッド・ナイルの少女をローランスと共有したのである。同じ部落のある少年を心に思い描きながらであったとはいえ、彼女とはじめて交渉をもったあと、ジッドは「まれに見る安静な気もちと爽やかさ」を感じる——「ぼくにとっては、医師のどんな（肺充血除去の）誘導剤よりもメリアムのほうが即効的だったことは疑うべくもない」。

少女との関係がはじまる少し前、ジッドは喀血していた。当人はさほど気にかけていなかったが、ローランスはひどく心配した。知らせをうけた彼の両親は、ジッドの母につたえるべきだと考える。こうして翌九四年の二月上旬にはジュリエットがビスクラにやってくる。近日到着の電報をうけとってジッドが抱いた感情はつぎのようなものだった——「母と再会することも、母にこの国を見せることも、ぼくにはうれしかった。だが、ぼくたちが落胆したこともまた事実だった。ぼくたちの共同生活はこんなに具合よくはじまっていたのに、ぼくたちの性本能の再教育が今ようやく緒についたばかりだというのに、これを中断しなければならぬのか。ぼくは、そ

んなことはあるべからざることだと抗議した。母が来たとしても、ぼくたちの生活にはなんの変化もあつてはならないと言いはった」
 「一粒の麦もし死なずば」。到着後、ふとした偶然から共同生活の実態を知った母は嘆き悲しみはするが、おもてだつて非難することはなかった。そして三月二十日頃には、病状の好転してきた息子のことをローランスに委ねて帰国の途につく。ジッドたちも長逗留のビスクラを離れチュニスまで彼女に同道、その後マルタ島、シラクサ、ナポリを経由して、四月十二日にはローマに到着している。

では北アフリカ滞在中、ルイスとはどんなやりとりが交わされていたのだろう。じつをいえば、ルイスの書簡はドゥーセ文庫に保管される十五通ほどが知られているが（ジッドの病氣を人づてに知って、連絡を乞う九三年十月二十八日付以外はすべて未刊）、ジッドのそれは、後に言及する九四年二月一日付以外には一通も存在が確認されていない（それにこのたびもう一通がくわる）。このあまりに顕著な量的不均衡は、母ジュリエットとの文通だけではなく、ウージェニス・ルアールやマルセル・ドルーアンら数人の友人との文通が中断していないことから見て、病氣がその原因であつたとは思われない。また、ジッドが実際には頻繁にルイスに手紙を書いたが、多くは紛失してしまつたというのも信じがたい。ジッドがすでにフランスを離れる前からヴァレリーにはつぎのように打ち明けていたからだ——
 「ルイスに手紙を書くことをぼくはぐつとこらえている。こちらが黙りこんでからというもの、ルイスは魅力のある手紙をわんさと

くれる。日によって、その調子によって、よく読んだり読まなかったりしているが、もうそれで心を動かされることはない。ただしジツドの評価は両義的であって、「ルイスの散文を美妙なものと思わずにはいられない」ので「彼にたいしてすっかり腹を立てていることはできないような気がする」と、人柄と作品とを区別しようとしてめている（付言すれば、これはまさに後のフランシス・ジャムにたいする態度でもある）。

つぎの書簡は、あらたに存在が確認された北アフリカ滞在中のルイス宛という点でも、またそれがもたらす情報の重要性においても第一級の資料と呼びうるものである。ただ、その執筆時期については若干の説明が必要だ。というのは、封筒が残っていないためと思われるが、「（ローマで投函）／ビスクラ」という書状冒頭の記述の上に、刊行者が「一八九四年四月半ば」としか補っていないからである。しかしながら、すでに述べたようにビスクラに滞在したのは三月二十日頃まで、いっぽうローマ到着は四月十二日で、すでにそれだけでも執筆と投函とのあいだには約三週間の隔たりのある。しかもビスクラでの近況報告といった書簡の性格を考慮すれば、時間的な隔たりはさらに大きいと見るべきだろう。

★書簡4（一八九四年三月半ば以前、ビスクラ。四月半ばローマで投函）

返事を受けとったはずだから、もう君は前のようにぼくの無沙汰を嘆くことはあるまい、もし説明が不十分だったなら問いただ

知られざる版本

してほしい、といった旨につづいて、「ぼくがぼくたちの友情を愛するのと同じように、友情のほうでもぼくを楽しませてくれる。危なっかしきはあるが、うまく友情を御していこう」。以下、ルイスの不安をとり除くために、ローランスとは依然いっしょにいること、体はおそらく少しよくなっていること、まだ帰国の予定はないことなどが簡条書きで短く記されるが、最後の三条は作品執筆を話題とする一連の記述――

「ほんの少しだけ書いている。体がもっとよくなれば、たくさん書けるだろう」。「『パリュード』という題の作品で、そのための銘句を見つけた」。この銘句はルイスが主題を判断する手がかりになるだろうと、ウェルギリウスの一節（メリベウスがティディリュスにむかっている）をして、たしかに畑は石ころだらけで、沼が牧場をイグサで縁取っているが、おまえはそれで十分に充たされている」、「第一の牧歌、四七―四八」を引用。だが、作品は「ほとんどは韻文」で、ルイスには思いもよらないものと述べ、「白色評論」誌が掲載を拒んでいる短い見本を同封する旨。

さらに、アトマンという少年がいっしょに生活しているが、「ぼくたちは彼とは肉體関係はない。ぼくたちはアヴンチュールを気に入っている。そして、ぼくはすばらしく喜びにみちている」とあり、追伸として、批評のかたちで二人の名がいっしょに載るようなことができないかと提案。また、「『パリュード』の第二十四頁と第二十五頁を送られたし」「返送されたしの意か」と。

微妙な友情関係への言及も興味ぶかいが、この書簡でなによりも注目されるのは『パリュード』執筆にかんする記述であろう。同作品は、パリの閉塞的な文学セナークルを、最近までそこに身をおいた自身をもふくめ容赦なく揶揄することで、象徴主義との決別を宣言したもののだが、ジッドは後年「一粒の麦もし死なずば」に「この本はぼくがフランスへ帰る前からすでにぼくの心中に宿っていた」と、また日記にはさらに具体的に「『パリュード』を書いたのは、ぼくが（ポール・リアル・ペール・ローランスとビスクラで）『背徳者』を生きていた期間だ」と述べている。じじつ彼は、この年の二月にはビスクラから、作品に言及する手紙をアンリ・ド・レニエに送っていた（レニエの同月十四日付返信による）。だが執筆そのものの経緯をつたえる同時代資料は、ローマ滞在中の五月に入ってから母宛書簡がこれまで知られていたものとも古いもので、しかもそこには「たいへんに困難で苦勞な仕事」「だが上手くいけば、すごいものになる」といった、ごく漠然としたことしか記されていない。そのような事情を反映して少なからぬ研究者が、とくに日記の記述の信憑性を疑問視し（たしかにそれは「ビスクラで『パリュード』を完成した」と読める）、ジッドが語っているのは作品の着想時期のことだと見なして、実際の執筆開始はローマ到着後に設定してきた。しかしながらこの書簡は、ただ単に着想の段階にとどまらず、すでにある程度の量がビスクラ滞在中に書かれていたことを明確に証言しているの

である。

ではこの草稿は、やがては完成稿（二三枚、現在は個人蔵のなかにおさまり、その冒頭部をなすものなのか。けっしてそうではない。書簡には「ほとんどは韻文」と記され、形式において散文の完成稿との相違が決定的だからである。ただし、ジッドがローマからフィレンツェへと転じた数日後のヴァレリー宛書簡（五月二十八日付）に「近代的な小説」とあることから、韻文による創作はその後長くはつづかず、ローマ滞在中の比較的早い時点で散文形式に変更されたものと思われる。これに関連して興味ぶかいのは、のちにルイスがあきらかに書簡4をふまえた記述を残していることだ。すなわち、同じ年の十一月にルイスは、『パリュード』は最初は韻文作品だった」こと、さらに、ジッドがだれ彼にとなく近況を問われて、『パリュード』を書いているとくり返しているうちに「『パリュード』を書いている男」の状況を物語するというアイデアを思いついた」とを、作者本人にむけて書いているのである。この記述はなぜか今日までほとんど等閑に付されてきたが、少なくとも形式上の変更にかんする前段の正確さが立証された以上、主題の移行を問題にする後段についても、もはや考慮・検討の対象から外すことは許されない。なお、ウェルギリウスの一節は結果的には作品の銘句としてではなく、冒頭部での話者と友人ユベール（ルイスがモデル）との会話のなかに、話者が書いている『パリュード』の主題説明のかたちで引用される。いっぽう実際の銘句には、やはりウェルギリウスから

探った『ユリアンの旅』の銘句「言え、いずれの地にか *Dic quibus in terris.*」(第三の牧歌、一〇六)と対照をなすべく、ジッド自身が作った一文「言え、なにゆえにここに *Dic cur hic?*」が置かれることになる。

書簡ではアトマンのことも話題にのぼっている。ビスクラ滞在中、身の回りの世話をしてくれたこの少年をジッドはたいへん可愛がり、帰国後はパリに呼びよせようとしたほどだ。しかしながら同性愛的な感情が介在しなかったこともまた確かで、したがって「ぼくたちは彼とは肉体関係がない」というのは当然といえば当然の内容だが、それにしても、なぜジッドはこの悪趣味ともとれる但し書きをつけくわえるのか。まず、メリアムの存在がその理由のひとつにあることは疑えない。彼女との関係はすでに二月一日のルイス宛書簡ではのめかされている。同書簡はドレー前掲書がごく部分的な引用しかしていないため、ローランスの関与も含め、どこまで詳細

が報告されていたかは推測の域を出ないが、いずれにせよ、但し書きの後続文「ぼくたちはアヴァンチュールを気に入っている」(「主語の選択はとりわけ示唆的」)をあわせ読むかぎり、少なくともジッドのほうでは躊躇することなく同行者との少女共有を前提として語っているのである。だが、アトマンが女性であるならばともかく、この事実だけでは但し書きの存在を十分に説明することはできない。では、なにが欠けているのか。ルイスがスースでの体験のことまで承知しているとは考えられないが(「一粒の麦もし死なずば」によれば、ジッドはこの体験にかんしてはローランスにさえ「なににも告げることができなかった」)、その記憶を強くとどめる「背徳者」の筆は、メリアムとの関係を念頭におく気安い冗談、まだ本質的同性愛者としての自覚を欠いているだけに可能な表現のなかで、個別的否定のかたちをとりながら、はからずも自らの禁忌領域に言及してしまった、これがもっとも自然な解釈なのではあるまいか。

(つづく)

ジュゼッペ・ザッペリ

妊娠した男

男性とキリスト教の手で
纂奪された権力の構図を
〈妊娠男〉の伝承に探る。

* * * * *

アラン・フルニエ

ル・グラン・モーヌ

夢のような幼少年時代と
かけがえのない出会いが
結晶した不滅の〈青春〉。

中 行 進 画 企